

司 会

水 落 健 治

中世最大の論争といわれる普遍論争が、12世紀にひとつの頂点を迎えたことは、哲学史の常識とされるところである。そしてこの論争はこれまで、シャンポーのギョームらに代表される実在論、ロスケリヌスに代表される唯名論、そして両者の対立を調停しようとする穏健な実在論に立つアンセルムス、概念論に近いアベラールという図式で理解されてきた。

だがこの図式は、この時代の研究が進むにつれて疑問視されるようになり、様々な論争を引き起こすに至る。その背景には、当該著作家の残存写本が少ないこと、ロスケリヌスなどの主張が間接的言及によってしか知り得ないという事情がある。この時代は、関沢氏がJ. マレンボンの語として引用されたごとく、「テキストの著者・年代を容易に特定できない」時代なのである。

今回の岩熊氏の報告は、長年、この時代の第一次資料（写本）の発掘・研究に取り組んでこられた氏の、現段階での論争の流れの総まとめともいえるものである。氏は、2つの新資料——ギョームが12世紀初頭に著したとされる『範疇論』注解および11世紀末に著されたりモージュ・テキスト——に依拠しつつ、11世紀末における『範疇論』と『エイサゴゲ』の理解状況を素描し、その状況の中からギョームとアベラールが出現してくるに至った経緯を描き出す。そして、特にアベラールに焦点をあてて、彼が、ギョームらとの論争の中で、岩熊氏が proto-vocales と呼ぶ立場から、その立場を徹底させることによってその立場を乗り越え、後期の sermo や status を論ずる立場へと自らの思想を展開・成熟させてゆく姿を、彼の成熟期の著作である *Logica ingredientibus* などにも言及しつつ描き出す。そしてその描写によって、

1. 11世紀末頃まで論争で問題になっていたのは、『エイサゴゲ』で論じられている類・種が res であるのか vox であるのか、ということなのであって、類・種によって指示される res の実在如何なのではない
2. アベラールが vox と res との間の意味論的關係に焦点をあてるに至ったのは、proto-vocales の立場から出発した彼独自の思索の展開の結果なのであって、

ポルピュリオス『エイサゴゲ』序文の間から直接に導き出されたものではない

ということを結論づけたのである。

この岩熊氏の報告は、12世紀の普遍論争に関する哲学史の大幅な書き換えを要請するものである。矢内氏が提起する「岩熊氏の枠組の中でのロスケリヌスとアンセルムスの位置づけ」の問題は、まさしくこの点にかかわるものであるし、関沢氏が述べられた「学派の呼称を当事者の自己呼称とすべきなのか、思想の内実に対応した哲学史的・外在的なものとすべきなのか」という問題は、哲学史という学問の孕む根本問題を明確に指摘したものと言うことができるだろう。

いずれにせよ、日本の中世哲学研究が、このような世界レベルの研究の最先端の問題を論ずることができるようになったことを率直に喜びたい。読者諸氏が、この報告を契機に普遍論争のさらに深い研究へと導かれることをこそ願うものである。

特定質問

矢内義顕

岩熊氏がこれまで発表されてきた研究の画期的な点は、11-12世紀の写本の探索と分析に基づいて、従来、実念論 (realism) - 唯名論 (nominalism) の図式で説明されてきた、この時代のいわゆる「普遍論争」の研究に *vocales* という概念を導入したことにある。*nominales* という語は、アベラールの死後に登場し、彼の主張は、従来の意味での nominalism ではなく *vocalism* と呼ぶべきものだという提案である。この提案は、この分野の研究者たちの間で市民権を得つつあると言えよう。

今回の発表「*Vocales* 再論」は、これまでの研究をさらに精緻化すべく、アベラールにおける proto-*vocalism* から *vocalism* への移行を提案する。氏によると、proto-*vocalism* とは、ポエティウスとアリストテレスの論理学的著作を *in re* の立場からではなく、*in voce* の立場から解釈する立場であり、普遍の問題とは関係がない。この proto-*vocalism* を携えてパリに來たアベラールが、シャンポーのギョームとの論争を通じて *vocalism* へと移行する経過が、リモージュ・テキストなどの新資料の検討によって明らかにされる。